NAGOYA CITY UNIVERSITY
高等教育院通信 2021.12 vol.11

主体的・対話的で深い学びの視点からの高大接続

名古屋市教育委員会連携推進教授
安藤理恵

令和３年度入試より大学入学共通テストが実施され、令和４年からは高等学校で新学習指導要領が開始する。今まさに高等学校と大学の接続に大きな転機が訪れており、今回の人事交流を通して、高等学校の教員が名古屋市立大学に存在する意義を感じずにはいられない。高大接続のよりよい形を考えるなかで、第一に考えるべきは、生徒及び学生にとって、より良い学びを提供することであり、それが未来の社会の担い手を育成する教員の使命であるだろう。教育の変化は著しい。しかし我々は本当の意味で、今現在の高校や大学をどれほど理解しているのだろうか。高等学校と大学を繋いでいるのは入試ではなく、学びのバトンを受け渡すことである。教育の受け渡しがより円滑に行われ、学生が大学での学びをより深いものにしていくために、高等学校と大学の教育の相互理解の必要性を強く感じる。今回、新学習指導要領について紹介するとともに、名古屋市立大学と名古屋市立高校が、主体的な学び手を育成していくために、互いに何が求められ、何ができるのかを考えたい。

新学習指導要領とは

新学習指導要領の開始に先立ち、高等学校では様々な準備が開始した。第一に新学習指導要領の理解の徹底だ。新学習指導要領では、教科・科目の構成も改訂され、国語・社会・外国語などでは新たな教科が登場する。「主体的・対話的で深い学び」の実現、そのための授業改善、さらにカリキュラム・マネジメントの確立等、様々な改革が高大接続改革の流れの中で検討されている。名古屋市立北高等学校においては、昨年度より「総合的な探究の時間」を先行実施し、「主体的・対話的で深い学び」の実現への試行錯誤を重ねている。既存教育課程の「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」と名称を変え、その内容は、生徒が主体的に課題を設定し、情報の収集や整理・分析をしてまとめるといった能力の育成を目的としており、教科横断的な学びを通して個々の探究心を深めるものとなる。具体的な内容としては、「自然環境とそこに起きているグローバルな環境問題」「地域の伝統や文化とその継承に取り組む人々や組織」「文化や流行の創造と表現」「職業選択と社会貢献および自己実現」等が挙げられている。従来の高等学校のイメージである、教師が一方的に講義する形式は、現在名古屋市立高校においては随分と変化し、双方向性のある学びが多く用いられているが、アクティブラーニングを用いた授業改善がより一層求められている。文部科学省による改革による我々教師に対するメッセージは、実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」を教えるだけでなく、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力や人間性」を育むこと、そして VUCA と呼ばれる現代社会において、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」を培う教育の必要性を重視

せよということに他ならない。受験や競争社会からの脱却から、真の教育が高校に問われていると感じる。それはまさに ESD（Education for Sustainable Development）である。名古屋市立大学人文社会学部では、ESD を通した先進的な取り組みが実践されている。我々高校の教員は、そこから多くを学び、実践していくべきであり、大学においてもその取り組みを全学部に生かして、より包括的な ESD の実現を推進し、高校と大学の学びの架け橋である初年度教育に生かして欲しい。

新学習指導要領に伴い高等学校が直面しているもう一つの課題は、観点別評価の導入である。高校での評価は、推薦入試等に直接かかわる問題で、この評価の方向性の大学側の理解は必須である。

学力を３つの要素に分け、基礎的・基本的な知識を「技能」「知識・理解」、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を「思考・判断・表現」、主体的に学習に取り組む態度を、「関心・意欲・態度」で評価する。観点別評価については、以前からその導入の必要性が問われてきたが、高等学校では「知識・理解」に偏重した評価からなかなか脱却できていないことが問題視されてきた。その背景には大学入試制度があるとはいえ、高等学校と大学が相互理解を深め、入試制度の見直し等を検討していく必要性を感じる。高等学校は、大学の求める学生の育成に尽力すべきであるが、大学の求める学生の資質とはいかなるものであるのか。

これからの社会に必要とされている人材には、次のような点が求められている。一つ目に、自律的活動力や自他理解など学び続けるための基盤となる「態度・価値観」を持つこと、二つ目に、コラボレーション能力や創造的・批判的思考力、学び方といった「スキル」を身に付けていること、三つ目に、従来型の「知識」を持つことである。また、自らを俯瞰的かつ客観的に捉える「メタ認知」は、様々な活動の場面において発揮することが求められており、全体を通じて不可欠なスキルである。「探究心があり、学びをアクションに結び付けられる実行力を持ち、コミュニケーションスキルの高い学生」が求められている。そしてそのような学生像は、高等学校での新学習指導要領において求められる「主体的・対話的で深い学び」により形成されると考える。そこで、私は次の二点を大学に提言したい。一つ目に、入試改革である。ぜひ新学習指導要領で求められている学びや評価に沿った入試の導入、すなわち現行の高大連携型推薦入試の再考と拡大をご検討いただきたい。また二つ目に、入学した学生への初年度教育を再考し、社会のニーズに見合った人材の育成するための基礎固めの確立、高大連携を通した、高校までに十分に身に付けられなかったスキルを補う教育への改革を実現して欲しいと願う。その実現のために、高大連携による相互理解、協力は今後も必要となるであろう。

商業高校で行われる実践的な学びを生かした高大接続

名古屋市教育委員会連携推進准教授
鈴木一平

高大連携の人事交流として４月より赴任しました鈴木と申します。私が所属している名古屋市立名古屋商業高等学校(通称:CA)での実践的な取り組みについてご紹介致します。

１．商業高校は学力が低く、やる気のない生徒が通うイメージは間違い

・卒業後の将来ビジョンが明確で、学習意欲が高い(普通科進学校の学力がある生徒も多数在籍)

・偏差値にあまり興味がなく、どのような経験が得られるか前向きにチャレンジする生徒が多い。

２．就職も進学も生徒に合わせた進路の希望が対応可能

・大学生と同じ大企業の事務系総合職の採用も増加しています。

・大学進学も地元文系有名校を中心に推薦入試で入学します。

３．総合的な探究の時間は何年も前から授業として実践している

・Career Approach Time(CATime)として、２年次に週１時間社会人基礎力の育成として、授業が行われている。単にインターンシップに行くだけが目的なのではなく、社会人として必要なことや事前準備、事後にはクラス発表を行い、優秀発表者は次年度に向けて１年生全体に対して発表を行っています。

４．ビジネスを外国語で学ぶ(グローバルビジネス科)

・商業高校で学ぶビジネスの授業の他に、さまざまなテーマから外国語(英語と中国語)を用いた発表を、台湾をはじめ海外の高校生と合同で行います。語学力だけではなく、協働によるチームワーク力やプレゼンによる表現力の向上など、楽しみながら必要とされる力が身に付きます。

５．地域を愛し、地域と共に成長する人材の育成

・地元商店街の活性化を目指すために、地域の問題点などを高校生の視点から考える授業を行っています。また、商店街だけではなく、同じ地域に通う大学生や地域住民の方々と共に、まちづくりに取り組んでいます。

・高校生から小学生へ出前授業を行い、授業を通してビジネスを学ぶ楽しさを伝えています。

６．強い愛校心で卒業後も学校を支える

・保護者の満足度が 95%を超え、生徒も兄弟姉妹で入学する生徒が多数在籍しています。卒業後もOB・OG として、求人支援や企業内研修などのサポートも率先して引き受けていただいています。在校生や保護者からは安心して卒業できると好評です。

他にも多くの活動を行っています。少しでも興味を持っていただければ幸いです。今回の人事交流を通じて、もっと一緒にやれることはあるのではないかと思っております。何かございましたら、遠慮なくご連絡ください。

suzukii@nagoya-ch.ed.jp　（下記写真は左から海外合同プレゼン、地域活性化発表、出前授業）

事務局教務企画室より

『NCU 高等教育院通信』の最新号をお届けいたします。全学の FD 活動や各部局における取り組み、旬なトピックスなど、“教育”に関する話題を広く皆様に提供していきますので、ご愛読いただければ幸いです。

ぜひ取り上げてほしい話題などありましたら、下記までご連絡ください。

ご意見・ご要望等はこちらまで　⇒　名古屋市立大学事務局教務企画室

TEL: (052) 872-5804　　Email: kyoumu_kikaku@sec.nagoya-cu.ac.jp